

# カンボジアにおける気候変動適応事業を対象とした多国間基金の有効性

Im Sophanavy

キーワード：地球環境ファシリティ(GEF)、UNDP、適応基金 (AF)、UNEP、  
多部門アプローチ (Multisectoral Approach) 生態系ベースアプローチ、脆弱性、カンボジア

## 1. 研究背景

D'Agostino and Sovacool (2011) は GEF-UNDP プロジェクト “Promoting Climate Resilient Water Management and Agricultural Practices in Rural Cambodia”を対象に気候変動に対する、制度、インフラ、そしてコミュニティの適応力への介入成果と課題に焦点を当てて研究を行った。だが、コミュニティの脆弱性に対する効果は明らかにしていない。GEF-UNDP プロジェクトはドナー主導であり、複雑な制度設計や管理構造、そして多部門アプローチ批判を受けている。一方で、AF-UNEP は生態系ベースアプローチを用い、シンプルな制度設計や管理構造で受取国主導と評価されている。この GEF-UNDP と AF-UNEP では、プロジェクトのアプローチと主導方法が異なっているため、プロジェクトが与えた脆弱性への効果も異なる。従って本研究は両プロジェクト前後でのコミュニティの脆弱性の変化を調査し、その有効性を分析するとともにプロジェクトにおける障壁を分析する。

## 2. 研究方法

本研究では AHP を用いた比較分析を行うために、国、地方レベルの気候変動適応の専門家を対象にしたアンケート調査を実施した。また、GEF-UNDP プロジェクト地域から 47 人、AF-UNEP プロジェクト地域から 80 人を対象に計 127 人に対してインタビュー調査を行った。

## 3. 分析結果

GEF-UNDP、AF-UNEP ともにプロジェクト前後で、わずかに脆弱性が増加した。AF-UNEP では国主導で生態系ベースアプローチを用いたが、適応能力が低い数値となった。その一方で初期段階の混乱にもかかわらず GEF-UNDP では適応能力を大きく改善したが、気候変動への敏感が増加したことで結果としてわずかながら脆弱性が増加した。

## 4. 結論

本論文は以下の 4 点を明らかにした。第 1 に、両プロジェクトともにわずかに脆弱性を増加させた。第 2 に、初期段階における管理構造での混乱にもかかわらず GEF プロジェクトは適応能力を増加させた。第 3 に国主導のプロジェクトであったにもかかわらず、AF プロジェクトは適応能力を増加させることができなかった。最後に違法伐採や農業製品への転換による森林減少といった外部要因による気候変動への敏感性増加の原因への対処が行えなかった。